

『春秋左氏伝国字弁』の国語学的研究*

——断定の助動詞について——

北澤 尚・小林 正行・顧 曉 琳

国語・国文学**

(2002年9月30日受理)

1. はじめに

『春秋左氏伝国字弁』全30巻は、尾張の人加藤正庵の講述による、漢籍国字解資料の一種である。文化八年(1811年)に刊行され、その後文政二年(1819年)に再版された。加藤正庵の伝記は詳しくは分かっていないが、『漢籍国字解全書』第13巻に付された「講述者の小伝」によれば、「加藤正庵は名は公達、正庵は其字なり。世々医を業として、特に傷寒論に精通したりと伝ふれども、其名は却て左氏伝国字弁の著者として噴々たり。」このように、加藤正庵は医師としてよりも『春秋左氏伝』の国字解を著した人として有名だったという。

中村通夫(1965)によれば、近世後期の講義筆記・国字解・俗語訳などは当時の教養層の言語の実態を反映するものとして極めて貴重な言語資料であるという。漢籍国字解についての国語学的研究は、中村通夫氏、杉本つとむ氏、金田弘氏によって推し進められ、既に多くの研究成果の蓄積がある^(註1)。『春秋左氏伝国字弁』については、中村通夫(1965)(1967)によって紹介され、文化文政期における、おそらく「最大の第一次デアル文献」であろうと注目されている。ただし、『春秋左氏伝国字弁』は、30巻15冊、本文総丁727丁、漢籍国字解全書本でも二段組で三冊を占め、総頁数は2,443頁にわたる膨大な言語資料であり、その全体を対象とした国語学的な立場からの実態調査はいまだなされていない。

そこで、本稿では、中村通夫(1965)(1967)の成果を基盤としつつ、『春秋左氏伝国字弁』の全巻を対象にした、断定の助動詞に関する悉皆調査を行うことにする。なお、中村通夫(1967)でも、既に「である」についてのみ、全体の約3分の1の分量にあたる序・巻1～巻10までの調査・分析を行っているが、本稿ではさらに、「である」以外の断定の助動詞もすべて対象とすることによって様々な面からの分析を試みることにする。

『春秋左氏伝国字弁』の本文については、北澤尚架蔵本(文政二年再版本)全30巻を使用し、活字本の『先哲遺著漢籍国字解全書 第13巻、第14巻、第15巻 春秋左氏伝国字弁』(早稲田大学出版部 明治43年刊)も適宜参照した。挙例に際しては、()内に文政二年再版本の巻数、丁数、表裏、行数を示し、用例検索の便宜上、[]内に『漢籍国字解全書』の頁数、段の上下、行数も示した。また、漢字は通行の字体に改めた。さらに、表を示す場合には、表中の空欄は用例無を表わし、百分率を用いる場合には小数点以下第二位を四捨五入した値を示した。

* A Grammatical Study of “Syunzyūsasiden-kokuziben”: Takashi KITAZAWA, Masayuki KOBAYASHI and GU XIAO LIN
(Department of Japanese Language and Literature) (Received September 30, 2002)

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

2. 断定の助動詞の使用実態

『春秋左氏伝国字弁』は、上述したように、中村通夫(1967)で、文化文政期における「最大の第一次デアル文献」と規定されており、同論文では巻10までの「である」の用例数を各巻別に示しつつ考察している。しかし、『春秋左氏伝国字弁』全体における「である」の総用例数や、「である」以外の断定の助動詞の種類やその使用量については不明であるので、まず最初に、ここで、『春秋左氏伝国字弁』で用いられる断定の助動詞の種類とその使用量を調査してみることにする。

全30巻の全数調査の結果、使用頻度順に「なり」「である」「じゃ」「でござる」「でござります」が用いられていることが明らかになった^(注2)。具体的におのおの断定の助動詞の総用例数と使用率を示すと次の通りである。

・第1位 「なり」	11,670例 (70.2%)	・第2位 「である」	4,203例 (25.3%)
・第3位 「じゃ」	407例 (2.4%)	・第4位 「でござる」	311例 (1.9%)
・第5位 「でござります」	32例 (0.2%)		

各断定の助動詞の、断定の助動詞全体に対する使用率と各巻の使用率を示したのが47頁の図表1である。この図表から、巻によってのばらつきがややあるものの、全体では「なり」が七割を占め、どの巻においても使用率一位になっていることが分かる。「なり」以外の断定の助動詞では、巻1を除く全ての巻で「である」が二位になっている。巻1では「じゃ」が使用率二位である。また、巻21では「でござる」「でござります」が他の巻に比べて、特に高い使用率を示している。中村通夫(1967)でも、『春秋左氏伝国字弁』において「なり」を文末とする文が最も多いという指摘がすでにあるが、今回の全数調査によって、断定の助動詞全体の中で「なり」が占める割合が70.2%であることが明らかになった。

では、「なり」以外の断定の助動詞に関しては、どのような文法上の特徴が見られるのか、以下、各断定の助動詞ごとにそのふるまい方を分析し、それぞれの特徴を探ることにする。

まず、各断定の助動詞の上接語と下接語に注目しつつ分析を試みる。各断定の助動詞を下接語の違いによって分類し、使用数を示したものが48頁～50頁の図表2-1～図表2-5である。各活用形式に関して、「～。」は言い切りの形、「～+助動詞」は「なり」「まい」などの助動詞類、「～+終助詞」は「か」「ぞ」などの終助詞類、「～+と」は引用の助詞「と」が、それぞれ下接する形式である。「～+条件」は「ゆゑ」「によつて」などが下接し、文が終止しない形式である。これらの具体的な形式については第3章以降で取り上げることにする。

なお、本稿では、「である」「でござる」「じゃ」「でござります」という表記は、全ての活用形式を総称する場合に用いる。一方、「である」形、「であつた」形などの「～」形という表記は各活用形式を指すこととする。さらに細分化して諸形式を示す必要がある場合には、図表2-1～図表2-5のように、「である。」「である+と」などと表記することとする。

3. 「である」の用法について

まず、「である」について論じる。48頁の図表2-1を見ると、「である」全4,203例のうち、「である」形3,022例(71.9%)・「であつた」形383例(9.1%)・「であらう」形742例(17.7%)であり、この三種類の形式を合計すると4,147例で、「である」全体の98.7%を占める。そこで、この三種類の形式を以下、分析の対象とし、それぞれの用法上の特徴について考察する。

ひとくちに「である」といっても、「である」形・「であつた」形・「であらう」形のそれぞれに、言い切りの用法、助詞「と」を下接する引用文中の用法、「ほどに」「によつて」などの条件形式を下接する用法など、さまざまな用法が見られる。まず、「である」形・「であつた」形・「であらう」形のおのおのについて、どのような下接語が多用されるのか、その傾向性を調べる。次に、上接語と下接語との組み合わせから、下接語の違いによって上接語に差異が見られるのかを分析する。そのうえで、「である」形・「であつた」形・「であらう」形の語法上の特徴を明らかにしたい。

3.1 「である」形

全3,022例の「である」形の中で、言い切りの「である。」が2,596例あり、「である」形の85.9%、「である」全体に対しても61.8%を占める。ついで、「である＋と」202例（6.7%）、「である＋助動詞」140例（4.6%）、「である＋条件」73例（2.4%）である。以上のように、言い切りの「である。」が圧倒的に多く用いられていることが分かる。

では、下接語にはどのような語が用いられているのか。まず、「である＋助動詞」の助動詞から見ていく。

・ コレカ管仲カ桓公ヲイサメテヒトヲ思ヒツカスルノハジメテアルナリ（巻4.1ウ.8〔295上4〕）
 のような、「なり」が下接した例が「である＋助動詞」全140例中、136例（97.1%）あり、大多数を占める。

残りの4例は、

- ・ 天命デアルマイヤ（巻13.21ウ.6〔249下17〕）
- ・ ソレ共ニ一門モナイ者ナレバ是非モナケレトモ誰カ陳氏デアルマイヤ（巻30.4オ.6〔763上10〕）
- ・ 魯国ト交リヲ善シテ時節ヲ待ル、ガヨイテ有マイカ（巻30.9オ.5〔778上9〕）
- ・ 何ヲ命シテモ吉デアルベキニ何ソ外ヲトスルゾト云ハレタ（巻30.20ウ.6〔815上17〕）

と、「まい」3例、「べし」1例である。

「である＋終助詞」と「である＋終助詞＋と」とを合わせると全8例あり、終助詞の内訳は、「ぞ」6例、「ものを」1例、「かな」1例である。

「である＋条件」の条件形式は以下のように多様である^(注3)。

- 「に」 20例：定式ヲサヘツトメ玉ヘバ十分デアルニ（巻30.22オ.2〔818下13〕）
- 「ゆゑ」 18例：魯ノ女デ有故書タ（巻6.1オ.8〔403下9〕）
- 「ほどに」 12例：此夏姫ト云者ハ不吉ナル者デアル程ニ無用ニセラレヨ（巻12.7ウ.6〔96下4〕）
- 「が」 8例：鮑子ガ酔タルヲミテ陳乞ガスカサズソノ方ノ主人ノ命テアルガ知ラヌカト云テ（巻29.16オ.6〔683上15〕）
- 「によつて」 3例：コノ親父ハ地理ニモクハシイヲトコデアルニ依テ子ニヲシユルナリ（巻7.20オ.6〔536上1〕）
- 「なれば」 3例：今度来タ士魴モマタ知伯ト同官デアルナレバ鄭ヲ伐タゴトクノ人数ヲヤラレテヨカラウ（巻13.24オ.3〔260上8〕）
- 「けれども」 3例：コノ二君ハ宋ヘ加勢ノツモリデアルケレ共サシテ精ニ入レラレナシ（巻28.20ウ.9〔633上13〕）
- 「を」 2例：悪人ジヤカラハ討テ出サガ本意デアルヲ還テ賂ヲ取テ出シナガラ…（巻5.2オ.8〔320下7〕）
- 「ならば」 1例：ソノトホリテ有ナラバ平子ハ出マイ（巻25.10オ.1〔382下7〕）
- 「のみならず」 1例：伯有一人ガ離レモノテアルノミナラズ汰ビ修ツタ故ニ難ニ免レヌト云タ（巻19.11オ.4〔709下1〕）
- 「うえに」 1例：大分ノ人数デアル上ニ方々ノ蛮ガ群リ裂テ居ルカラハタヤスクハセメラルマイ（巻9.12オ.4〔661下16〕）
- 「ところを」 1例：此時分戦国ナレバ隣国デモ領内ヲ通ルニハ道ヲ借用致シタイト頼タ上ニテ通ル法デアル
 処ヲ今武城ヲコトワリナシニ通ラヌ（巻25.1ウ.7〔355上11〕）

次に、「である」形の下接語の違いに注目しつつ、それぞれがどのような上接語をうけるのか調べてみた。次頁の表3-1は縦の行に下接語別に「である」形を並べ、横の列に上接語の種類を示し、それらを組み合わせた表現の用例数を示したものである。

この表の中で、「コト」は形式名詞「コト」をさす。また、「形動語幹」とは、「形容動詞語幹」の略称であり、「不埒」「大事」など、情態性の名詞に「である」形が下接する類を指す。「である」形のその他の特徴として、形容動詞連体形の「強大な」「ゆたかな」などに「である」形が直接下接する例が見られる（表の中では「形動連体」と略称）。この「形動連体」の用法は、「である」の中でも「である」形だけに見られ、「じや」やその他の断定の助動詞でも皆無である。

表 3-1

	名詞	コト	動詞	動詞+ノ	形容詞	形動語幹	形動連体	助動詞	助動詞+ノ	格助詞	副助詞	並立助詞	合計
である。	1146	275	288	25	25	48	8	746	24	3	8		2,596
である+助動詞	83	9	12		4	1	1	29			1		140
である+終助詞	2	1						1					4
である+と	123	32	17	4		4		19			2	1	202
である+終助+と	3	1											4
である+条件	53	10				3	1	3	3				73
である(連体法)	2	1											3
合 計	1,412	329	317	29	29	56	10	798	27	3	11	1	3,022
使用率 (%)	46.7	10.9	10.5	1.0	1.0	1.9	0.3	26.4	0.9	0.1	0.4	0	

「である」形全体では、名詞を上接語とする用法が多く、形式名詞「コト」を上接語とする用法と合わせると五割を超える。また、助動詞を上接語とする用法も多く、全体の四分の一を占める。上接語となる助動詞の種類と使用頻度を、文例とともに以下に示す。

「た」 623例：宋ノ国迄来タレバー一家一門ガ乱ヲ作シテ亡タト云フヲ聞タデアル
(巻10.10ウ.4 [721下12])

「たる」 1例：路車ヲ下シタマハリタルデアル
(巻21.11オ.2 [34上12])

「ぬ」 91例：楚ニソムイテハアヤウイユエウカト晋ニモクミスルコトモナラヌデアル
(巻15.9ウ.5 [368下13])

「るる」 43例：鄭伯ノモテナシノ用意ヲイタサル、デアル
(巻23.21オ.5 [241上4])

「なんだ」 18例：初ノ会ニハ出ナンダデアル
(巻6.3ウ.9 [412下1])

「ごとく」 7例：声ト云ヘトモ亦味ノコトクデアル
(巻24.15オ.8 [317下18])

「せる」 6例：兩人ヲ出シテ楚ノ師ヲイタサシムトハイドマセルデアル
(巻17.12オ.8 [543上3])

「する」 6例：是ハ囚ニヨソナカラノミ込マスルデアル
(巻18.4ウ.9 [592下6])

「さする」 1例：晋侯ノ呂相ヲ使ニシテ秦ヘ手切ノ口上ヲ伝ヘサスルデアル
(巻13.4ウ.7 [176下15])

「たい」 1例：夫人ニシタイデアル
(巻5.6オ.4 [333下3])

「やうな」 1例：君カラ悪事ノ御免シカ出タ様ナテアル
(巻2.4ウ.6 [133上12])

以上のように、「である」形が助動詞を上接語とする場合、その助動詞は「た」が約八割を占める。なお、「ごとし」については、他の助動詞と異なり、連用形「ごとく」のみが用いられている。湯澤幸吉郎(1957)によれば、当代の口語では、助動詞「ごとし」は既に活用が失われており「ごとく」専用であったという。

また、動詞や助動詞を上接する場合に現代語では一般に「～のである」という形になるが、『春秋左氏伝国字弁』では、表3-1から分かるように「～のである」の形はごく少数であり、「動詞+ノ」と「助動詞+ノ」の使用率を合わせても1.9%に過ぎない。それに対して、「ノ」を伴わずに、直接、「である」形に続く用法の使用率は、「動詞」と「助動詞」の使用率を合わせると36.9%にもなる。「助動詞+ノ」の助動詞の種類は、「た」21例、「ぬ」2例、「るる」4例である。

では、下接する語によって上接語に違いが出てくるのだろうか。使用頻度の高い「である。」「である+助動詞」「である+と」「である+条件」のおのおのについて、その上接語別の使用率を比較したものが、下の表3-2である。

表 3-2

	名詞	コト	動詞	動詞+ノ	形容詞	形動語幹	形動連体	助動詞	助動詞+ノ	格助詞	副助詞	並立助詞
である。	44.1	10.6	11.1	1.0	0.9	1.8	0.3	28.8	0.9	0.1	0.3	0
である+助動詞	59.3	6.4	8.6	0	2.9	0.7	0.7	20.7	0	0	0.7	0
である+と	60.9	15.8	8.4	2.0	0	2.0	0	9.4	0	0	1.0	0.5
である+条件	72.6	13.7	0	0	0	4.1	1.4	4.1	4.1	0	0	0

「である。」「である+助動詞」では、他に比べ助動詞を上接する割合が高いことが分かる。

3.2 「であつた」形

全383例の「であつた」形の中で、言い切りの形「であつた。」は226例で、「であつた」形の59.6%を占める。ついで、「であつた+条件」80例(20.9%),「であつた+と」49例(12.8%)である。

「であつた+助動詞」23例の助動詞は、

- ・ コレヒトヘニソナヘノナイカラデアツタナリ (巻12.24ウ.3 [156下13])

のような「なり」16例と、

- ・ 愚痴ナワロデ有タソウナ (巻2.5オ.9 [135上14])

のような「さうな」7例である。

「であつた+終助詞」3例と「であつた+終助詞+と」1例の終助詞は、「か」3例、「は」1例である。

「であつた+条件」の条件形式も、「である+条件」と同様、多様である。

「ゆゑ」 31例：コレハ盟書カツマラヌ文言デアツタユエナリ (巻25.15ウ.9 [402下10])

「(た) れども」10例：コノ来麤ハオゴリモノテアツタレドモ少モサカラハズ屈服シタ (巻15.14オ.5 [385上6])

「について」 6例：曹伯ノ病氣デ有タニ附テ名代ニ世子ヲ魯ヘラコサレタ (巻2.15オ.8 [166下2])

「を」 5例：平陰ノ大夫デ齊侯ノ出頭デアツタヲコロシタ (巻17.16オ.5 [555下14])

「に」 5例：マヘハ侯デアツタニ伯ニ降サレタナリ (巻3.25ウ.6 [270下5])

「によつて」 5例：此射ラレタ時ニハマダ微官デ有タニ因テ経ニ除タ (巻3.12ウ.1 [230下4])

「けれども」 5例：久シイ早リデ有タケレドモ五穀ハ相應ニトレタ (巻8.4オ.3 [563下9])

「が」 4例：寵愛デアツタガ卒セラレタ (巻20.20ウ.7 [816上2])

「(た) れば」 4例：美色デ有タレバ宣公ノ自分ノ御秘ニセラレタ (巻2.23オ.3 [189下11])

「ほどに」 2例：楚王ノ理ニ服シテコレハワガ丁簡チガヒデアツタホドニ (巻21.16ウ.2 [54下10])

「から」 1例：元ヨリ約束デアツタカラ何ゴトモ心マ、ニスルデアル (巻18.12オ.5 [618下14])

「で」 1例：国主同士ノヤウナ軍ノ仕ザマデアツタデ克ト記サレ (巻1上.9オ.5 [38下15])

「(た) るを」 1例：全体魯ヲ伐ツシラベデアツタルヲ齊ガ出シヌイテ魯ト和シタユエ (巻29.25オ.7 [711下14])

次に、「であつた」形も、「である」形と同様に、上接語と下接語を組み合わせで下の表3-3に示す。

表3-3

	名詞	コト	動詞	動詞+ノ	形容詞	形動語幹	形動連体	助動詞	助動詞+ノ	格助詞	副助詞	並立助詞	合計
であつた。	203	17				2		4					226
であつた+助動詞	19	1				1				1		1	23
であつた+終助	3												3
であつた+並立助詞	1												1
であつた+と	43	5						1					49
であつた+終助+と	1												1
であつた+条件	73	2				3		1			1		80
合 計	343	25	0	0	0	6	0	6	0	1	1	1	383
使用率 (%)	89.6	6.5	0	0	0	1.6	0	1.6	0	0.3	0.3	0.3	

「であつた」形全体では、名詞を上接語とする用例が約九割を占め、圧倒的に多い。なお、「である」形で見られた助動詞や動詞を上接語とする形式はほとんど用いられない。また、動詞と助動詞に接続する「～のであつた」の形も皆無である。

わずかに上接語として用いられる助動詞は、「た」3例、「るる」「ぬ」「ごとく」各1例ずつである。

「である」形では623例と圧倒的に上接助動詞として用いられていた「た」が、「であつた」形ではわずか3例しか用いられない理由として、「であつた」形では、それ自体に含まれる「た」によって「過去」の意味を表わされており、そのうえ上接語として「た」を重ねて用いることは起こりにくかったことが考えられる。

上接語と下接語の組み合わせについて、使用頻度の高い「であつた。」「であつた+と」「であつた+条件」

を取り上げ、上接語別の使用率を比較したものが下の表3-4である。

表3-4から分かるように「であつた。」「であつた+と」「であつた+条件」のいずれにおいても、そのほとんどすべてが名詞かまたは形式名詞「コト」を上接語とする。「形容動詞語幹」も名詞性の高いものである。「であつた」形では、下接語の違いによる上接語の差異は見られない。

表3-4

	名詞	コト	動詞	動詞+ノ	形容詞	形動語幹	形動連体	助動詞	助動詞+ノ	格助詞	副助詞	並立助詞
であつた。	89.8	7.5	0	0	0	0.9	0	1.8	0	0	0	0
であつた+と	87.8	10.2	0	0	0	0	0	2.0	0	0	0	0
であつた+条件	91.3	2.5	0	0	0	3.8	0	1.3	0	0	1.3	0

3.3 「であらう」形

「であらう」形では、言い切りの「であらう。」と「であらう+と」との二つの形式で用例数の大半を占める。「であらう。」が348例 (46.9%), 「であらう+と」が307例 (41.4%) と、どちらも四割以上の使用率である。また、「であらう+助動詞」の例は皆無である。「であらう+終助詞」と「であらう+終助詞+と」の用例数を合わせると47例 (6.3%) あり、「である」形・「であつた」形における終助詞の現れ方とは異なる。「であらう+終助詞」の終助詞の種類と使用頻度を具体的に示せば、「か」8例「ぞ」8例「や」3例「ものを」1例である。また、「であらう+終助詞+と」でも、「か」14例「ぞ」12例「や」1例であり、使用される終助詞の種類は大差ない。

「であらう+条件」の条件形式は以下のとおりである。

「ほどに」 10例：アレガアノ習シヲ十分ニ盈サセテ有ラバ後ニハ滅ヒ尽ルデ有フ程ニ驕セタカヨイト云タ
(巻10.11ウ.6 [724上13])

「が」 10例：禍ガ作ルデ有フガ必ス秋ノマツリヲスル時分デ有フホトニ (巻18.24オ.5 [660上3])

「に」 5例：カナラズ免サル、デアラフニコ、ニト、マラレヨト云タ (巻24.12ウ.4 [308下6])

「し」 3例：吾晋ヘ從テモ晋ノ方ハ退クデアラフシマ從ハヌト云テモ退クデアラフ
(巻15.6ウ.5 [359上18])

「ならば」 3例：ワレー人ノ君デアラウナラバウチ死モセウガ (巻17.16オ.6 [556上8])

「けれども」 3例：タトヒ成就ハスルデ有フケレドモ末ハトゲマイト云タ (巻20.6ウ.9 [770上7])

「から」 2例：後々ハコノ方トモノモ逼リテ来テ身ヲウシナハスルデアラフカラハナンゾ去ザルマイヤ
(巻29.14オ.6 [667上1])

「によりて」 1例：様子ガヨクバ師モ成就スルデアラウニヨリテ君跡ヨリ継キ玉ヒタラバ茲敵ハアルマイ
(巻25.19ウ.2 [413上4])

「なら」 1例：若皆御供ヲシタニ吾カ御供ヲセナダト云ノ御答メテ有フナラソレハ君ノ御心得違ト云者ナリ
(巻6.16オ.4 [451下13])

「ときに」 1例：令尹ノ来ラレタラバ直ニ見ラル、デアラウ時ニソノ侃獻上ニイタサレヨト云タ
(巻26.3オ.4 [439下13])

3.1の「である+条件」や3.2の「であつた+条件」と異なる点は、それらで多用されていた「ゆゑ」が全く用いられないことである^(注4)。

「である」形・「であつた」形と同様に、ここで「であらう」形についても上接語と下接語を組み合わせ、次頁の表3-5に示す。

「であらう」形全体の特徴として、動詞と助動詞を上接語とする用例が多く、八割を占め、逆に名詞を上接語とする用例が少ない点が挙げられる。この特徴は、「である」形とも「であつた」形の特徴とも異なる。また、これまでの「である」形・「であつた」形と同じように、動詞と助動詞を上接語とする場合に「動詞+ノ」「助動詞+ノ」の形はまれである。

上接語となる助動詞の種類と用例数を文例とともに示す。

「るる」 90例：若青カ罰ヲ受ル寸ニハマタ同ツミニ罰ヲ下サル、デアラフト也 (巻24.11ウ.8 [305上5])

「らるる」 3例：三度敗レテ晋君ヲ得ラル、デ有ウト也 (巻5.23オ.3 [387上17])

表 3-5

	名詞	コト	動詞	動詞＋ノ	形容詞	形動語幹	形動連体	助動詞	助動詞＋ノ	格助詞	副助詞	並立助詞	合計
であらう。	26	4	256		1	2		58	1				348
であらう＋助動詞													0
であらう＋終助詞	11	2	6					1					20
であらう＋と	53	9	183	1		2		57	1		1		307
であらう＋終助詞＋と	15		6	1				4			1		27
であらう＋条件	7	2	24					6					39
であらう(連体法)	1												1
合 計	113	17	475	2	1	4	0	126	2	0	2	0	742
使用率 (%)	15.2	2.3	64.0	0.3	0.1	0.5	0	17.0	0.3	0	0.3	0	

- 「られる」 1例：又其通りニシタナラバ不埒ナトテ其方ガ責メラレルデアラウ (巻5.11ウ.5 [352上9])
- 「る」 2例：今年中ニ君ト昭子トハ死ナルデアラウ (巻25.9ウ.4 [381上16])
- 「た」 13例：大勢ノ家士ドモニアマネク相談メサレタデアラフ (巻29.35オ.4 [742下1])
- 「たる」 1例：鄭ハサテオキ遠人マデモキタルデアラウト云テ (巻14.20ウ.8 [335上15])
- 「つ」 2例：コノ以後四十年立ヌウチニ呉ハ滅ヒテ越ヨリ有ツデアラウトナリ (巻26.19ウ.6 [496下17])
- 「ぬ」 10例：諸侯ノ心ヲウシナフト云コトナラバヨモヤ為玉ハヌデアラウ (巻23.23ウ.2 [248下5])
- 「する」 2例：後々ハコノ方トモニモ逼リテ来テ身ヲウシナハスルデアラフカラハナソゾ去ザルマイヤ (巻29.14オ.6 [667上1])
- 「ごとく」 2例：甲兵三百乗ヲ以テワレニシタガハズバコノチカヒノゴトクデアラウト也 (巻28.10オ.1 [598下7])

以上のように、「るる」が助動詞の約八割を占める。なお、「助動詞＋ノ」の助動詞は、「た」「さする」が各1例である。上接語と下接語の組み合わせについて、使用度数三位までの「であらう。」「であらう＋と」「であらう＋条件」を取り上げ、その上接語別の使用率を示したものが下の表3-6である。

表 3-6

	名詞	コト	動詞	動詞＋ノ	形容詞	形動語幹	形動連体	助動詞	助動詞＋ノ	格助詞	副助詞	並立助詞
であらう。	7.5	1.1	73.6	0	0.3	0.6	0	16.7	0.3	0	0	0
であらう＋と	17.3	2.9	59.6	0.3	0	0.7	0	18.6	0.3	0	0.3	0
であらう＋条件	17.9	5.1	61.5	0	0	0	0	15.4	0	0	0	0

「であらう。」では動詞を上接語とする用法が七割を超え、「であらう＋と」「であらう＋条件」では六割程度と若干の差異が見られるものの、同じ傾向性を示している。また、「であらう＋条件」に関しては総数が少ないため、単純に使用率で比較することは難しいが、「であらう＋と」と同様に、名詞を上接語とする割合が「であらう。」に比べてやや高いことも指摘できる。

3.4 「である」のまとめ

調査の結果、「である」の最も中心的な活用形式が「である」形であり、そのなかでも言い切りの「である。」の用法が「である」全体の六割を占めていることがわかった。「であつた」形でも言い切りの「であつた。」の用法が中心であるが、「であらう」形では、言い切りの「であらう。」とともに「であらう＋と」も多く用いられている。

また、「＋助動詞」の用法では、「なり」を下接するものが「である」形で136例(「である」形全体の4.5%)、「であつた」形で16例(「であつた」形全体の4.2%)があるが、「であらう」形では「＋助動詞」の例が全くない。

「＋終助詞」「＋終助詞＋と」の用法では、「である」形では「ぞ」6例「ものを」1例「かな」1例の計8例が用いられ、「であつた」形では「か」3例「は」1例の計4例が用いられているのに対して、「であらう」

形では、「か」22例「ぞ」20例「や」4例「ものを」1例の計47例が用いられていた。「である」形・「であつた」形に比べ、「であらう」形では終助詞が用いられることが多いといえる。

「+条件」においては様々な条件形式が用いられるが、「であらう」形では、「である」形・「であつた」形で多用される「ゆゑ」が全く用いられていない。

上接語について見ると、「である」形では、名詞が約五割を占める。また、活用語も約四割あり、そのうち、動詞の終止形は全体の一割ほどに過ぎず、むしろ、助動詞「た」の方が多用される傾向にある。一方、「であらう」形では、「である」形以上に活用語が上接語となることが多く八割を占めているが、「である」形とは対比的に、動詞の終止形が全体の約六割と多用され、助動詞も「るる」が多用される。なお、「であつた」形は、「である」形とも「であらう」形とも異なる傾向を示し、九割以上の上接語が名詞である。

4. 「でござる」の用法について

次に、「でござる」について論じる。巻末の図表2-2を見ると、「でござる」は、先に述べた「である」に比べて用例数は少ないが、「である」と対応する活用形式や下接語の形式が多く現れる。そこで、両者を比較するために、「である」形に対して「でござる」形、「であつた」形に対して「でござつた」形、「であらう」形に対して「でござらう」形の考察を行う。

「である」形3,022例に対して「でござる」形210例、「であつた」形383例に対して「でござつた」形9例、「であらう」形742例に対して「でござらう」形72例と、用例数そのものには大きな隔たりがあるものの、その共通点や相違点について観察を行うことは、『春秋左氏伝国字弁』中の断定の助動詞の使用実態を考察するために有効と考えられる。なお、「でござれ+条件」については17例が現れ、「でござつた」形よりも数が多いが、すべて「でござれば」で、名詞を上接語とするものが16例、動詞を上接語とするものが1例である。このように「でござれ+条件」は変化に乏しいため、若干の用例を次に示すにとどめる。

- ・ 本体デゴザレバ其様ナコトハ仰セラレヌ筈ナリ (巻6.16オ.4 [451下11])
- ・ 不調法ナル女デゴザレハ御意ニ入ラズバ帰シテ玉ハレト謙退シテ… (巻10.11オ.8 [723上16])
- ・ 敵邑デ要心スルヲ知テ不虞ヲフセグデゴザレハソノ吉ナルヲコノウヘハゴザルマイトナリ (巻21.18オ.1 [59.上15])

「である」の分析と同じく、「でござる」形・「でござつた」形・「でござらう」形について、どのような下接語が多用されるのか、その傾向性を調べる。次に、上接語と下接語との組み合わせから、下接語の違いによって上接語に差異が見られるのかを考察する。そのうえで、「でござる」形・「でござつた」形・「でござらう」形の語法上の特徴を明らかにしたい。

4.1 「でござる」形

「でござる」形は、「でござる」全体の311例の内、210例を占める中心的な活用形式である。全210例の「でござる」形の内、言い切りの「でござる。」は128例あり、「でござる」形の67.5%、「でござる」全体の41.2%を占める。ついで、「でござる+と」が61例 (19.6%)、「でござる+条件」10例 (3.2%)と続く。

「でござる+助動詞」2例の助動詞は、

- ・ ミナへ定マリノ威儀カアルヲ云タモノデコザルナリ (巻19.22ウ.3 [748上17])
- ・ ソノ言モ鬼神ニ忠信ガアツテ詐リヲ述ベヌユエデゴザルナリ (巻24.13ウ.1 [311下4])

のように2例とも「なり」である。

「でござる+終助詞」2例の終助詞は、

- ・ 賀スルトハ何ノコトヲ賀スルノデゴザルカ存セヌ (巻7.2オ.5 [482下16])
- ・ シカレバ踐土ノ令ニシタガフヲデゴザルカ (巻27.2オ.3 [509上7])

のように2例とも「か」で、「でござる+終助詞+と」7例の終助詞は、

- ・ 其モトノ車モ、ウコレ限リデゴサルカトタヅネタ (巻20.11オ.4 [783下5])

のように、「か」が4例、

- ・ 如何イタシタコトデコサルゾト云タ (巻16.17オ.7 [482下13])

のように、「ぞ」が3例用いられている。

「でござる+条件」10例の条件形式は多様である。以下に、種類と使用頻度を文例とともに示す。

「ゆゑ」 3例：口上ヲアラタメテ子圍カ年カサデコザルユエ跡メヲツギマシタト告タ
(巻20.16ウ.6 [802下17])

「が」 2例：万事足下ノオコナヒニ準シテ手本トイタシタ^レデゴザルガ…
(巻21.18ウ.6 [62上4])

「ならば」 2例：弥祝デ益ヲ得ルコトデコサルナラバ諸人ノ詛フ方デモ亦損ガゴザラウ
(巻24.14オ.8 [314下9])

「ほどに」 1例：土ハ土地ヲ得ルト云天ノツゲデゴザルホドニ拝シテ戴キ玉ヘト云タ
(巻6.11ウ.7 [438上15])

「について」 1例：先君カラ持ツタヘノ敵品デゴザルニ付テ下臣ニ申付テ御役人衆マデ上ラレマス
(巻9.3オ.3 [630上8])

「うちに」 1例：トテモノコトニ君ノ存生デコザルウチニ…
(巻26.7オ.1 [451下11])

次に、「である」と同じく、「でござる」形の上接語と下接語を組み合わせて下の表4-1に示す。

表4-1

	名詞	コト	動詞	動詞+ノ	形容詞	形動語幹	形動連体	接続詞	助動詞	助動詞+ノ	格助詞	副助詞	並立助詞	合計
でござる。	90	16	3	2		3		1	5	3	1	3	1	128
でござる+助動詞	2													2
でござる+終助詞		1		1										2
でござる+と	35	11	3	1		8			2	1				61
でござる+終助詞+と	6	1												7
でござる+条件	8	2												10
合 計	141	31	6	4	0	11	0	1	7	4	1	3	1	210
使用率 (%)	67.1	14.8	2.9	2.0	0	5.2	0	0.5	3.3	2.0	0.5	1.4	0.5	

「でござる」形全体では、名詞を上接語とする用法が多く、形式名詞「コト」を上接語とする用法と合わせると八割を超える。他の用法はどれも少ないので、断言は控えたいが、動詞や助動詞を上接語とする場合に、「ノ」を介する用法の使用率が「ノ」を介せずに直接「でござる」形に続く用法の使用率と、あまり変わらないことを指摘しておく。「でござる」形における上接語としては、「動詞」6例に対して「動詞+ノ」4例、「助動詞」7例に対して「助動詞+ノ」4例と、用例数そのものは少ないものの、「である」形の「動詞」317例に対する「動詞+ノ」29例、「助動詞」799例に対する「助動詞+ノ」27例という圧倒的な差と比べると、両者がほぼ互角なのである。次に、上接語となる助動詞の種類と使用頻度を、文例とともに示す。

「助動詞」

「ごとく」 3例：百穀ノ時節ノ雨ヲアヲギノゾム如クデゴサル
(巻16.10オ.5 [459上13])

「べき」 1例：ソナヘダニアレバ案ジハナキユエ吉トイフベキデゴザル
(巻21.17ウ.9 [59上11])

「るる」 1例：先君ノタマモノヲウケウトイタサル、テコサルト云タナリ
(巻21.24ウ.3 [83上.4])

「らるる」 1例：ソノワケハ陽ガマケルユエ食セラル、デゴザル
(巻24.19オ.9 [331下9])

「た」 1例：只今呉ヲ去マシタノハソノツバサヲ切タデゴザルト云タ
(巻23.18オ.4 [230下6])

「助動詞+ノ」

「た」 3例：民心ノマドヒヲトキタノデゴザル
(巻21.27ウ.6 [93上18])

「るる」 1例：主人ニハコトノホカヨロコバレタルソノ志ヲ御フルマヒ申サルルノデゴザル
(巻21.20オ.5 [67下9])

下接する語によって上接語に違いは見られるだろうか。ある程度まとまった用例数を持つ言い切りの「でござる。」と、「でござる+と」について上接語の使用率を比較したものが、次頁の表4-2である。

「でござる+と」で形容動詞語幹を上接語とする用法がやや多いが、両者とも名詞や形式名詞「コト」を上接語とする用法に用例が集中する特徴は変わらない。

表4-2

	名詞	コト	動詞	動詞+ノ	形容詞	形動語幹	形動連体	接続詞	助動詞	助動詞+ノ	格助詞	副助詞	並立助詞
でござる。	70.3	12.5	2.3	1.6	0	2.3	0	0.8	3.9	2.3	0.8	2.3	0.8
でござる+と	57.4	18.0	4.9	1.6	0	13.1	0	0	3.3	1.6	0	0	0

4.2 「でござつた」形

「でござつた」形の用例数は少なく、9例にすぎない。そのうち、言い切りの「でござつた。」が5例、「でござつた+と」が1例、「でござつた+終助詞+と」が1例、「でござつた+条件」が2例である。用例をすべて掲げ、上接語についても観察する。

「でござつた」5例は、名詞を上接語とするものが3例、形式名詞「コト」を上接語とするものが2例であった。

- ・ 私ガ壮年ノ時分ニサヘ人並ニ御間ニアハヌモノデコサツタ (巻7.16オ.4 [525上7])
- ・ 只今ハ使番ノ者ガ申ソコナヒデコサツタ (巻11.6オ.7 [20上14])
- ・ 止マリテ居タハーノ罪デコサツタ (巻18.3ウ.9 [588下12])
- ・ 大老ヲウヤマフテ朝タニミマハレマスコトデゴザツタ (巻12.23ウ.8 [154下8])
- ・ 皮冠ヲ挙テ召ス則ニハ虞人トモガ参ルコトデゴザツタ (巻24.14ウ.4 [315下7])

「でござつた+と」は、形式名詞「コト」を上接語とするものが1例である。

- ・ コノタクミハハヤヒサシイヲデゴサツタトマコトラシク云タナリ (巻21.20ウ.3 [69上4])

「でござつた+終助詞+と」の終助詞は「ぞ」であり、名詞を上接語としている。

- ・ イカノ義デゴザツタゾト云タ (巻21.10オ.7 [31下11])

「でござつた+条件」の条件形式には、「とき」「に」が1例ずつ用いられる。上接語については、名詞が1例、動詞が1例である。

- ・ 前方隠公ノ公子デゴザツタトキ鄭人ト狐壤ト云トコロニテ合戦シテ隠公ハ生ドリニナラレタ (巻1下.23ウ.2 [121下8])
- ・ 左モナクバカツデゴザツタニト云ハル、デアラウ (巻15.3オ.2 [346下12])

以上の「でござつた」形全体について、上接語を調べると、名詞を上接語とするものが5例、形式名詞「コト」を上接語とするものが3例、動詞を上接語とするものが1例となる。「でござつた+条件」の用例が1例動詞を上接語とするほかは、全て名詞を上接語としており、「であつた」形の特徴と一致する。

4.3 「でござらう」形

全72例ある「でござらう」形では、「であらう」形と同じく、言い切りの形「でござらう。」と「でござらう+と」の二つの形式で用例数の大半を占め、「でござらう。」が38例 (52.8%), 「でござらう+と」が27例 (37.5%) ある。そして、「でござらう+終助詞」3例、「でござらう+終助詞+と」2例、「でござらう+条件」2例と続く。

「でござらう+終助詞」と「でござらう+終助詞+と」に用いられる終助詞の全用例を以下に示す。

「でござらう+終助詞」

- ・ 刑臣計リデゴザラウカ (巻6.15ウ.4 [450上8])
- ・ 成ホドコレモアタフルデゴザラウトモ (巻22.19オ.2 [170上11])
- ・ 御前ヲオソル、デゴサラウトモ (巻22.19オ.4 [170下2])

「でござらう+終助詞+と」

- ・ サレバドウデゴザラウゾト云タ (巻17.13ウ.6 [547下6])
- ・ ソレハ成ホド御前ヘタマハルデゴザラウトモトナリ (巻22.18ウ.4 [168下17])

上記のように終助詞「とも」が3例、「か」「ぞ」が1例ずつ用いられている。終助詞「とも」が「でござらう」以外の断定の助動詞に下接した例は今回の調査では見られなかった。

「でござらう+条件」に用いられた条件形式について、用例を示す。

- ・ 又三代ニ成レハ祖父ノ武子ガホドコシタ恩ハキユルデコザラフシ (巻15.19ウ.3 [403上14])

・ オツ、ケホロボサル、「モウチワスル、デゴザラウガ」 (巻21.17ウ.6 [58下7])
次に、「でござる」形と同様に、上接語と下接語を組み合わせて下の表4-3に示す。

「でござらう」形全体の特徴として、動詞と助動詞を上接語とする用例が多く、逆に名詞を上接語とする用例が少ない点が挙げられる。この特徴は、「でござる」形の特徴と対立しており、ちょうど、「であらう」形に対する「である」形の関係と対応する。また、「動詞+ノ」「助動詞+ノ」を上接語とする用例は皆無であり、この点では「でござる」形とは異なる。

表4-3

	名詞	コト	動詞	動詞+ノ	形容詞	形動語幹	形動連体	接続詞	助動詞	助動詞+ノ	格助詞	副助詞	並立助詞	合計
でござらう。	9	2	18						9					38
でござらう+終助詞			2									1		3
でござらう+と	6	2	9						10					27
でござらう+終助詞+と	1		1											2
でござらう+条件			2											2
合 計	16	4	32	0	0	0	0	0	19	0	0	1	0	72
使用率 (%)	22.2	5.6	44.4	0	0	0	0	0	26.4	0	0	1.4	0	

次に、上接語となる助動詞の種類と用例数を文例とともに示す

- 「るる」 8例：私ハ必定殺サル、デコサラウト也 (巻11.12ウ.6 [43下13])
「らるる」 1例：水徳ガマダホロビズシテ再ヒモチヒラル、デゴザラフ (巻22.4オ.7 [117上1])
「た」 3例：弟ノ叔虎ト同心シタデコサラウ (巻16.17ウ.5 [484上4])
「たる」 2例：十家ノ領知九縣ノ戎車九百乗ヲ以テヨセキタルデゴザラウ (巻21.16オ.6 [53下12])
「ます」 2例：楚ヨリモ必ズ防ギニ出マスデゴザラウ (巻26.15ウ.5 [485上5])
「まする」 1例：随分楚ノ師ヲモクヒトメマスルデゴザラウトナリ (巻21.17ウ.9 [59上3])
「ぬ」 1例：決シテ天カラサウハナサレヌデゴザラウト云タ (巻15.23ウ.3 [417上13])
「よる」 1例：先祖ノ神モマコトニヨロコビヨルデコザラウ (巻21.24ウ.1 [82下11])

「るる・らるる」が多用されるという特徴は、「であらう」形の特徴と一致している。また、「ます・まする」という聞き手に対する敬意を表わす助動詞が「でござらう」に上接している点も興味深い。

4.4 「でござる」のまとめ

調査の結果、「でござる」の最も中心的な活用形式は「でござる」形であり、そのなかでも言い切りの「でござる。」の用法が「でござる」全体の四割を占めることが分かった。「でござつた」形は用例数が少なく、数の上では「でござれ+条件」形のほうが多い。「でござらう」形は言い切りの「でござらう。」とともに「でござらう+と」も多く用いられている。「+助動詞」の用法については、「でござる+助動詞」に「なり」を下接語とする用例が2例見られるだけである。「+終助詞」「+終助詞+と」の用法については、「でござる」形で「か」6例「ぞ」3例、「でござつた」形で「ぞ」1例、「でござらう」形で「とも」3例「か」「ぞ」各1例が見られた。「+条件」の用法については用例数は少ないものの、様々な形式が見られる。特に、「でござる+条件」では「ゆゑ」3例用いられていたが、「でござらう+条件」では、全く用いられず、「である」の場合と対応している。

上接語については、「でござる」形では名詞が約八割を占める。「でござつた」形でも、総数は少ないものの、ほぼすべてが名詞を上接語とする。「でござらう」形では活用語が約七割を占め、そのうち動詞が約四割、助動詞が全体の約三割を占める。

このような使用状況を3.4で述べた「である」の特徴と比べてみると、「でござる」形・「でござつた」形・「でござらう」形は、「である」形・「であつた」形・「であらう」形に比べると、それぞれ用例数は少ないものの、上接語と下接語の傾向がよく似ていることが分かった。

5. 「じや」について

「じや」は、他の断定の助動詞と違い、活用形が欠けている。巻末の図表2-3から、「じや」407例の内、言い切りの「じや。」が263例で64.6%を占め、ついで「じや+と」の用法が120例 (29.5%) あり、「じや」はこの二つの用法ではほぼすべてを占める。また、巻1で特に多用され、『春秋左氏伝国字弁』全巻における「じや」の総用例数の半数近くが現れる^(注5)。

「じや」の下接語の種類は限られるが、具体的にどのような語が用いられたのかを見ていく。次に、これまでと同じく、上接語と下接語との組み合わせの傾向性についても見てみる。

5.1 「じや」の下接語

「じや」の下接語については、「じや+と」「じや+終助詞」「じや+条件」だけであるが、それぞれどのような語が下接語となっているのだろうか。

「じや+終助詞」は2例で、2例とも、終助詞「はさ」が用いられている。「はさ」は、終助詞「は」に間投助詞「さ」が接続したものである。2例とも巻11に現れ、同じ用いられ方をしている。

- ・ 楚ノ政ガヨイ故ジヤハサ (巻11.2ウ.5 [6下15])
- ・ 諸事順ガヨイ故ジヤハサ (巻11.2ウ.6 [7上12])

「じや+条件」の22例には五種類の条件形式が用いられている。条件形式の種類と使用頻度を文例とともに示す。

「に」 8例：字ヲ云ノガサタマリジヤニ名ヲ云タハ太平ナト云ノカ貶シタノシヤ (巻1上.4オ.8 [28上11])

「によつて」 7例：大都テサヘ三分一ジヤニ依テソノ次ノ中ト成テハ五分一中ノ次小ハ九分一トスル (巻1上.7オ.8 [34下2])

「ほどに」 4例：慶父カ器量ナ者ジヤホドニコレヲタテマセウト云タトカタラレタ (巻3.32オ.8 [291上16])

「が」 2例：マタ悪ト知ラバ早クアラタメテ長ゼヌヤウニスルガヨイト云「ジヤガ」 (巻1下.11オ.3 [87上6])

「から」 1例：悪人ジヤカラハ討テ出スガ本意デアルヲ還テ賂ヲ取テ出シナガラ… (巻5.2オ.8 [320下7])

5.2 「じや」の上接語

上接語と下接語とを組み合わせ、表5に示す。

表5

	名詞	コト	動詞	動詞+ノ	形容詞	形容詞+ノ	形動語幹	形動連体	助動詞	助動詞+ノ	格助詞	副助詞	接続助詞	合計
じや。	200	33	3	2		1	7		1	6	4	4	2	263
じや+終助詞	2													2
じや+と	94	9					12					4	1	120
じや+条件	16	6												22
合 計	312	48	3	2	0	1	19	0	1	6	4	8	3	407
使用率 (%)	76.7	11.8	0.7	0.5	0	0.2	4.7	0	0.2	1.5	1.0	2.0	0.7	

全体では、名詞と形式名詞「コト」を上接語とする例とで九割近くを占める。その他はどれも少ないが、形容動詞語幹を上接語とする例が19例とやや多い。では、具体的にどのような形容動詞語幹が用いられたのか、文例を見てみる。

- 「もっとも」 7例：是ハアハヌト仰ラル、モ御尤ジヤ (巻6.16オ.4 [451下11])
- 「まし」 3例：左ヤウニニゲハシリテハダマサウヨリハ死ダカマシジヤ (巻15.6ウ.3 [359上6])

「否」	2例：恵公ノアイツハ不礼ヲ云タデ <u>否</u> ジヤト云テ用ヒラレナンダ	(巻5.23オ.6 [388上13])
「明白」	1例：自分ニ迎ヘルテハナイト云コトガ明白シヤ	(巻1上.13オ.8 [48下16])
「残念」	1例：釈例ニ委ク有タソウナニ其書ノ亡ヒタハ <u>残念</u> シヤ	(巻1上.16ウ.3 [55下11])
「大事」	1例：コ、ラノ辞命ト云ガ <u>大事</u> シヤ	(巻1下.3ウ.9 [71上2])
「不審」	1例：コ、ニ名ノナイハ <u>不審</u> ジヤト云	(巻1下.14オ.3 [95上15])
「下手」	1例： <u>下手</u> シヤト云テ馬鹿ノ鳥スキヲソシリタ	(巻4.5オ.3 [305上15])
「不祥」	1例：趙盾ガ向フノ辞カ順ナ従ハヌハ <u>不祥</u> ジヤト云テ退タ	(巻9.7ウ.6 [645下7])
「貪欲」	1例：タトヒ大ナルトカメハ無クトモ賞ヲモトムルト云ハアキタルコトヲシラス <u>貪欲</u> ジヤト云テ	(巻18.17ウ.8 [639下2])

以上のように、様々な語が現れるが、「もっともじや」という表現がやや目立つ。また、「じや」の上接語が「助動詞」「助動詞＋ノ」の場合、助動詞は、すべて「た」である。

6. 「でござります」について

「でござります」は、「でござる」の連用形「でござり」に助動詞「ます」が下接した形式であるが、本稿では他の断定の助動詞との比較のため、一語として扱う。さて、巻末の図表2-4を見ると、「でござります」全32例の内、言い切りの「でござります。」が15例とほぼ半数で、「でござりませう。」が7例と続く。「でござります。」「でござりました。」「でござりませう。」にさらに助動詞や終助詞が下接する例はなく、条件形式が下接する例が「でござりませう」形に1例あるだけである。

用例数が極めて少ないため、各活用形式の用例を上接語別に以下に全て示し、上接語と下接語の組み合わせについても合わせて見る。

6.1 用例の分析

「でござります。」の全15例を上接語別に示す。まず、名詞を上接語とするものは8例である。

- ・ 莊公ノ御袋様ヘ一端ノコトワリニ制ト申ストコロハ甚要害ノサカシイ所デゴザリマス (巻1上.6ウ.5 [33上7])
- ・ コノ二箇所ハ君ノ御サカヒ目デ肝要ノ地デゴザリマス (巻3.27オ.2 [276下2])
- ・ 私ハ賤イ小役人デゴザリマス (巻5.19ウ.7 [377上16])
- ・ 御前ノ御国モ私ガ国トテモ同格ノ国デゴザリマス (巻6.13ウ.2 [444上2])
- ・ 所デ士季ガ首ヲ下テ云ニハソレハ有難イ思召デゴザリマス (巻10.4オ.9 [699上6])
- ・ 私ハマタ桓公ノ末孫ナレバコレマタ姜姓デ御前トハ同姓デゴザリマス (巻17.15オ.1 [551上4])
- ・ イヤソレハ儀ト云モノデゴザリマス (巻21.14オ.5 [45下14])
- ・ コレミナ札ノ肝要ト云モノデゴザリマス (巻21.15ウ.2 [50下6])

形式名詞「コト」を上接語とするものは以下の1例である。

- ・ オノヅカラ日月ノ災ノセメヲウクルデゴザリマス (巻21.25オ.7 [85上11])

動詞を上接語とするものは以下の2例である。

- ・ 誓ヲ立ルデゴザリマス (巻13.12ウ.3 [212上1])
- ・ ソノ民ヲウシナフナキヲ以テ礼ノ用トスルデゴザリマス (巻21.14オ.5 [46上1])

「動詞＋ノ」を上接語とするものは以下の1例である。

- ・ コノ詩ハ政ノ仕方ガワルイト云ノデゴザリマス (巻21.25オ.6 [85上9])

形容動詞語幹を上接語とするものは以下の2例である。

- ・ 夫人ガ歎イテ云ル、ニハソレハ甚ダ不吉デゴザリマス (巻3.3ウ.3 [205上13])
- ・ 帰リタク思召スモ御尤デゴザリマス (巻6.8オ.3 [425上8])

副助詞「のみ」を上接語とするものは以下の1例である。

- ・ 政ヲツ、シムト云ハ三ツヲツトムルノミテデゴザリマス (巻21.25オ.8 [85下1])

次に、「でござります＋と」全4例について示す。

- ・ 君夫人様ノ御馬デゴザリマストコタヘタ (巻18.7オ.9 [601下8])
- ・ 近習ノ者ガコレハワルイコトデゴザリマストイサメタ (巻17.15オ.7 [552下8])
- ・ 一様ニナイ^レ如此デゴザリマストナリ (巻21.29ウ.6 [102上15])
- ・ 孟丙サマニハ国姜ノ方カラノ御客公孫明ガミエテデゴザリマスト云タナリ (巻21.10オ.2 [30下12])

以上のように、「でござります+と」の上接語は、名詞、形式名詞「コト」、助動詞「ごとく」、接続助詞「て」が各1例である。

「でござりました。」全2例は、どちらも名詞を上接語としている。

- ・ ソノコトバニ晋楚ノ従国ハタガヒニアヒ朝見スルヤウニトノ約デゴザリマシタ (巻21.1ウ.4 [2下12])
- ・ ナルホド吉デゴザリマシタ (巻21.17ウ.2 [58上6])

「でござりませう。」全7例については、名詞、形式名詞「コト」を上接語とするものが各1例である。

- ・ 大ナルトガメト云ハ衛ノ君デゴザリマセウ (巻21.25オ.5 [84下16])
- ・ 下知ヲ加ヘ玉ヘト云^レデゴザリマセウ (巻2.19ウ.5 [180下1])

動詞を上接語とするものが以下の3例である。

- ・ シカラバ早々カヘルデゴザリマセウ (巻17.14ウ.4 [550上1])
- ・ 食ハオホセ付ラレタラバサシ上ルデゴザリマセウ (巻21.10ウ.2 [32下4])
- ・ 魯衛ノ二国ガコノ悪ヲウクルデゴザリマセウ (巻21.25オ.2 [84上13])

「動詞+ノ」と助動詞を上接語とするものが1例ずつである。用いられた助動詞は「るる」である。

- ・ 魯ハタ^ニソノ災難ノアマリヲウクルノデゴザリマセウ (巻21.25オ.5 [84下13])
- ・ サダメテソナヘガアリテナサル、デゴザリマセウ (巻21.16オ.2 [52下1])

「でござりませう+と」全3例は、動詞を上接語とするものが2例、助動詞を上接語とするものが1例である。用いられた助動詞は「ます」である。「～ますでござりませう」という形になり、聞き手に対する敬意を表わす助動詞「ます」が二重に用いられている。

- ・ 衛ヘハ大キクアタリ魯ヘハチサクアタルデゴザリマセウトナリ (巻21.25オ.2 [84下3])
- ・ 魯ハ上卿ニタ、ルデゴザリマセウトナリ (巻21.25オ.5 [84下17])
- ・ キ、オボヘタトホリヲ申上マスデゴザリマセウト云テ (巻21.5ウ.3 [16上8])

「でござりませう+条件」の1例は動詞を上接語としている。用いられている条件形式は「に」である。

- ・ 右ノ三国カラサダメテセメヨセテウバ、ウトスルデゴザリマセウニ此ウヘハトナリ三国ノ要害ヲソナヘタマヘ (巻21.26オ.5 [88上17])

以上の用例を、上接語と下接語を組み合わせると表6に示す。

表6

	名詞	コト	動詞	動詞+ノ	形容詞	形動語幹	形動連体	助動詞	助動詞+ノ	格助詞	副助詞	接続助詞	並立助詞	合計
でござります。	8	1	2	1			2				1			15
でござります+と	1	1						1				1		4
でござりました。	2													2
でござりませう。	1	1	3	1				1						7
でござりませう+と			2					1						3
でござりませう+条件			1											1
合 計	12	3	8	2	0	2	0	3	0	0	1	1	0	32

「でござります」形と「でござりました」形は名詞を上接語とする用法に偏り、「でござりませう」形は動詞と助動詞を上接語とする用法に偏る。全体の用例数が極めて少ないため、使用率を示すことはしないが、これまで見てきた「である」や「でござる」と全く同じ傾向を示している。

7. おわりに

以上、『春秋左氏伝国字弁』における断定の助動詞についての全数調査を行い、その使用状況を観察した結果、従来不明であった様々な点が明らかになった。その中でも、特に顕著であると考えられる傾向性や特徴について次に示す。

- 『春秋左氏伝国字弁』全巻における断定の助動詞の総数は、16,623例であり、その中で、文語形「なり」が11,670例あり、全体の70.2%を占めることが分かった。ついで、「である」が4,203例あり、25.3%を占める。「じゃ」、「でござる」も使用されているが、それぞれ約2%にすぎない。また、各断定の助動詞において、最も用例数が多いのは終止形言い切りの用法である。
- 断定の助動詞「である」では、言い切りの「である。」が「である」全体の六割を占めている。特に、上接語では、「である」形では名詞が約五割を占める。また、活用語も約四割あり、その中で助動詞「た」が多用される傾向にある。一方、「であらう」形では、「である」形以上に活用語が上接語となることが多く八割を占めているが、「である」形と対比的に、動詞の終止形と助動詞「る」が多用される。「であつた」形では、「である」形とも「であらう」形とも異なる傾向を示し、九割以上の上接語が名詞であった。
- 断定の助動詞「でござる」は、上記の「である」と比べると、その一割以下の311例の使用である。上接語については、「でござる」形では名詞が約八割を占める。「でござつた」形でも、総数は少ないものの、ほぼすべてが名詞を上接語とする。ただし、「でござらう」形では活用語が約七割を占める。このような「でござる」形・「でござつた」形・「でござらう」形の三者の使用状況を、上記の「である」形・「であつた」形・「であらう」形の三者と比べてみると、使用量の上で大差があるものの、上接語の傾向はよく似ている。
- 断定の助動詞「じゃ」は諸活用形が欠けているために、他の断定の助動詞との比較が難しいが、その上接語はほとんどが名詞か形式名詞「コト」である。
- 断定の助動詞「でござります」は、全32例にすぎず、稀少である。上接語の分布は、上記の「である」「でござる」とまったく変わらない。
- 「である」「じゃ」「でござる」「でござります」の各下接語に注目してその用法を調べると、名詞類を下接語とする連体用法は、「である」形に3例、「であらう」形に1例しか見られなかった。また、現代語とは異なり、断定の助動詞の下に断定の助動詞「なり」をさらに下接する用法が、「である」形に136例、「であつた」形に16例、「でござる」形にも2例見られた。

なお、『春秋左氏伝国字弁』における分析の視点として、地の文と会話文の文体的対立にも言及すべきであったが、例えば、文脈の上で、講述体の文末としての「である」であるか、会話部の文末としての「である」であるか、などの用例の解釈上の問題もあり、今回はその観点は導入しなかった。

本稿の冒頭でも述べたように、『春秋左氏伝国字弁』は、漢籍国字解の資料の中でも膨大な言語量を誇るため、本稿では断定の助動詞に限定してその悉皆調査を行ったが、その他の表現にも口語的な形式が混在し、さらに多面的な調査・分析の可能性を残すが、それらは今後の課題としたい。

(注1) その一部を示せば、金田弘 (1980), 同 (1984), 同 (1997), 杉本つとむ (1963) などである。

(注2) これら五種類の断定の助動詞のほかに、「にある」41例、「にてある」7例、「にござる」7例、「にござります」1例が見られた。このうち「にある」「にござる」「にござります」は形容動詞語幹に下接する用法に限られており、形容動詞活用語尾としての固定的な用法であるので、本稿では分析の対象から除く。「にてある」7例の用例は以下のとおりである。「サテ莊伯ト隱公トハ同時ニテアルナリ (後序.1ウ3 [18上3])」「大切ナ武事ニ指カ、ツテ大將ヲ命ジ軍令ヲ出スト云段ニ及デ心ノウゴクノハ盈タル心ノ散ニテアル (巻3.3ウ5 [205下1])」「仕返シニテ有タ (巻3.16オ3 [241上15])」「ソレハ元ヨリ私カ子ガネガヒ望ム所ニテアルト云タナリ (巻21.9オ6 [28上6])」「己ハ非ニテアリナガラ手段ニテ理分ニスルヲ昏トス (巻23.16ウ6 [226上1])」「叔父晋ノ唐叔ハ吾ガ祖成王ノ御同母弟ニテアレバ (巻23.19オ9 [234下17])」「何ユエニテアツタカ大分山ノ木ヲキリアラシタ (巻23.24ウ6 [253上11])」

(注3) この中には、伝統的な文法では接続助詞ではなく、形式名詞とみなされる形式も含まれるが、「である (連体

法)」の用例と比較すると、「魯国ノ記録ノ名目デアル春秋トイウ名ハ… (序.1ウ.5〔2下1〕)」などの名詞とは明らかに性質が異なるため、「である+条件」として扱った。

(注4)「であらう(連体法)」については、反語的な表現である次の1例が見られた。「誰デアラウ」で文がいったん終止するとも考えられる。「晋ノ祀ヲ主ル者ハ君デナクテ誰デアラウ外ニハナイ (巻6.16ウ.6〔453下6〕)」

(注5)なお、異表記の「ぢや」については、本稿で使用した本文では以下の1例のみであった。「司馬ノ司空ノト云名ヲ付レバ官名ヲカヘネバナラヌデ是モ付ケヌコトヂヤ (巻2.13オ.11〔160上11〕)」図表では、「じや。」の欄に加算した。

参考文献

金田 弘 (1980)「漢籍国字解とその言語」『国語学』123集

金田 弘 (1984)「後期江戸語教養層の言語資料『中庸筆記』をめぐって」『現代方言学の課題3 史的研究篇』明治書院

金田 弘 (1997)「漢籍国字解書『国訳古文孝経』とその言語」『国学院雑誌』98巻9号

杉本つとむ (1963)「漢籍国字解とその文体」『武蔵野女子学院短期大学紀要』3

中村通夫 (1948)『東京語の性格』川田書房

中村通夫 (1963)「『である』小考」『中央大学文学部紀要』13

中村通夫 (1965)「後期近世語研究の新分野」『中央大学文学部紀要』17

中村通夫 (1967)「『である』再考」『中央大学文学部紀要』22

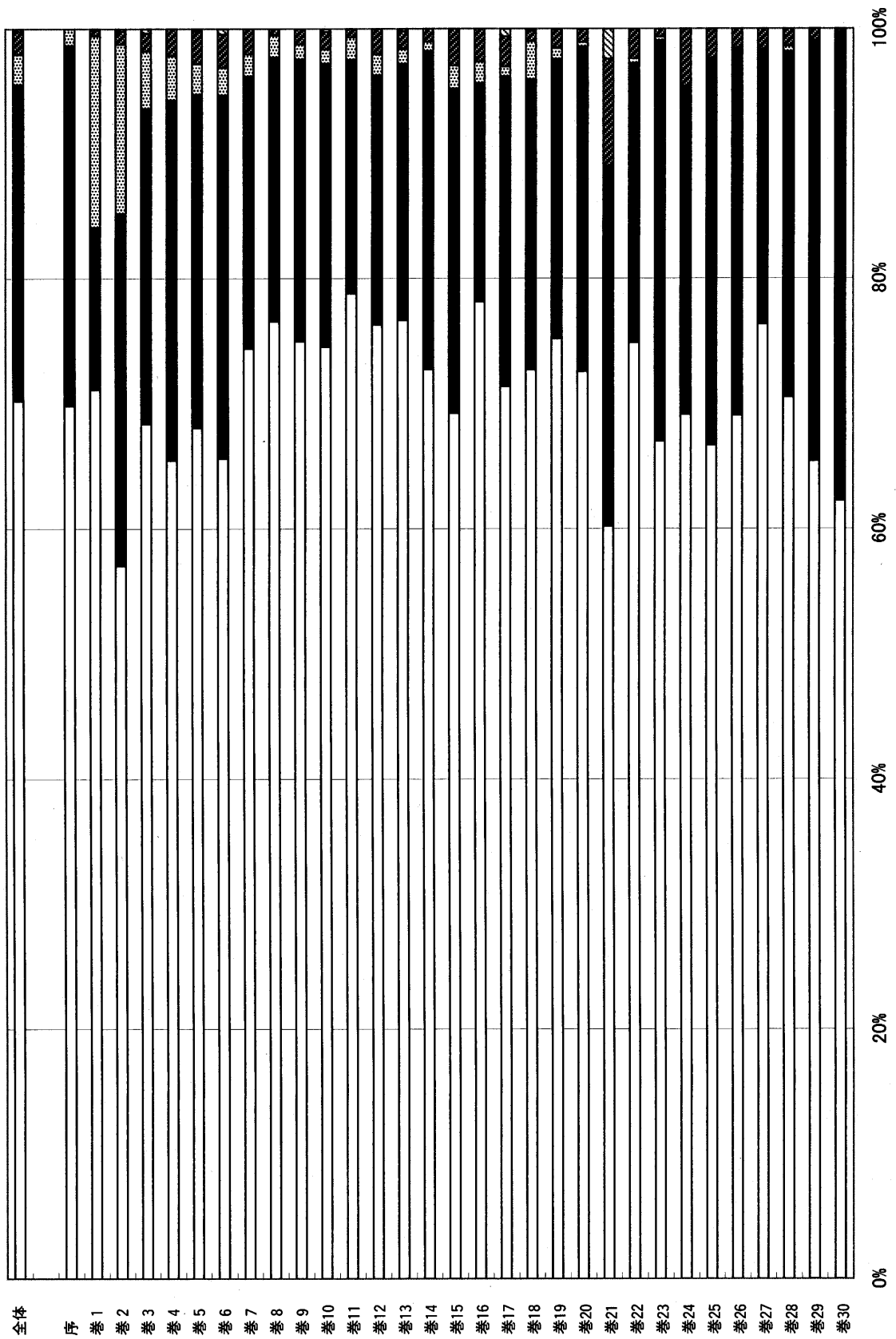
山本 淳 (1993)「『春秋左氏伝国字弁』の格助詞「が」「の」—人物関係の語に下接するもの—」『野州国文学』49 (国学院大学栃木短期大学)

湯澤幸吉郎 (1936)『徳川時代言語の研究』風間書房

湯澤幸吉郎 (1957)『増訂江戸言葉の研究』明治書院

図表 1

□ なり ■ である 田じや ■ でござる 田でござります



図表2-1

	序	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8	巻9	巻10	巻11	巻12	巻13	巻14	巻15	巻16	巻17	巻18	巻19	巻20	巻21	巻22	巻23	巻24	巻25	巻26	巻27	巻28	巻29	巻30	合計
	48	93	93	112	22	102	86	71	58	47	54	55	64	56	55	59	36	76	66	66	115	151	64	121	87	104	86	52	73	221	203	2,596
である+助動詞		1	1	11	3		2	1	1		4		1	3	1		2		4	5	10	2	10	15	5	15	9		1	9	24	140
である+終助詞	1								1		1						1															4
である+	6	1	2	3		2	1	4	5	2	2	3	5	7	3	3	4	11	6	6	13	12	11	15	8	10	17	6	7	14	13	202
である+終助詞+						1							1										1							1		4
である+条件	2		1	3		3	5	1	2	3	1	1	1	3	2	7	2	3	1	2	6	4	3	2	2	4	1		4	1	3	73
である(連体法)	1		1																								1					3
であつた。		16	17	11	5	9	10	5	4	6	13	3	14	5	11	13	7	8	5	11	8	7	4	5	5	1	8	6	3	3	3	226
であつた+助動詞		4	2	1		1		1					4					1	1		2	2					1			2		23
であつた+終助詞		1	1	1																												3
であつた+並立助詞		1																														1
であつた+	1	2	1	3		1	1	2		1	5	1	3	2	1	2		2	3	3		3	1	1	1	2		2	1	4		49
であつた+終助詞+																						1										1
であつた+条件	2	9	2	4	1	2	2	2	1	1		3	5	2	3	6	2	3	3	1	2	2	3	3		3	2	2	2	3	4	80
であらう。		3	12	3	4	19	10	12	4	8	3	6	6	14	12	23	14	10	25	13	18	12	8	17	14	17	8	8	22	13	10	348
であらう+助動詞																																0
であらう+終助詞						2	1	1			1	1			2					1		3	1	2		2		2			1	20
であらう+	3	9	7	5	3	8	9	6	4	3	10	9	11	7	7	7	9	5	18	17	20	15	12	12	11	15	13	10	6	19	17	307
であらう+終助詞+		1			2	1							1			1	1	1	1	2	1	6	3	4		1					2	27
であらう+条件							1	2	2	1	1	1	1	1	2	1	2	2	3		1	2		1	1	1	2	3		5	3	39
であらう(連体法)							1																									1
であつて		1	1							2	2			1					1	1						1	1			2		13
でありた																					1	1				1	1		2	1	7	
であり+条件																1			1	1	1	1	1								6	
であり(中止法)																														1		1
であれ+条件			1				1		1				1			1	1		4		2		3	2	3	1	1	1	1	2	3	27
であらん																										1						1
であらん+終助詞																									1							1
合計	64	142	142	157	40	151	130	108	83	74	97	83	117	102	99	123	80	122	142	129	200	223	121	203	137	181	151	93	120	302	287	4,203

図表 2-2

	序	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8	巻9	巻10	巻11	巻12	巻13	巻14	巻15	巻16	巻17	巻18	巻19	巻20	巻21	巻22	巻23	巻24	巻25	巻26	巻27	巻28	巻29	巻30	合計
でござる。		2		6	3	6	6	3	1	1	1	1	4	4	2	6	5	4	2	2	3	36			13	6	3	3	2	3		128
でござる+助動詞																				1				1							2	
でござる+終助詞								1																			1				2	
でござる+			2	1		4	1	3	1		2		5	2		2	1	5	1	2	10	2	3	5	2		2	3	2	61		
でござる+終助詞+			1														2				1		1				1	1		7		
でござる+条件				1		1	1		1											1	1	1	1	2	1		1	1	10			
でござった。								1				1	1						1					1						5		
でござった+																				1										1		
でござった+終助詞+																					1									1		
でござった+条件	1															1														2		
でござらう。				1		3	1						2	1	1	1	3	1		2	1	7	4	2	3	3	1	1			38	
でござらう+終助詞							1																2							3		
でござらう+			2			1	1	2		1	1					2	1	1	1	1	4	3			3	1	1	1	1	27		
でござらう+終助詞+																		1				1								2		
でござらう+条件																1					1									2		
でござつて	1															1														1		
でござつて+条件										1																				1		
でござれ+条件	1															1														17		
合計	0	5	5	9	3	15	12	10	2	4	6	3	12	7	4	14	12	12	5	9	8	67	13	4	24	14	8	7	6	9	2	311

図表 2-3

	序	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8	巻9	巻10	巻11	巻12	巻13	巻14	巻15	巻16	巻17	巻18	巻19	巻20	巻21	巻22	巻23	巻24	巻25	巻26	巻27	巻28	巻29	巻30	合計
じゃ。	2	130	52	26	3	6	4	2	6	1	1	5	7	4		4			7		1		1					1			263	
じゃ+終助詞												2																			2	
じゃ+と	1	27	14	2	2	5	5	7	1	3	4	1	3	2	3	5	7	3	12	4	2		1	2	1	1	1		1		1	120
じゃ+条件		12	2	1		3	1										1	1		1											22	
合 計	3	169	68	29	5	14	10	9	7	4	5	8	10	6	3	9	8	4	19	5	3	0	2	2	0	1	1	0	2	0	1	407

図表2-4

	序	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8	巻9	巻10	巻11	巻12	巻13	巻14	巻15	巻16	巻17	巻18	巻19	巻20	巻21	巻22	巻23	巻24	巻25	巻26	巻27	巻28	巻29	巻30	合計
でござります。		1		2		1	2				1		1					1				6										15
でござります＋と																		1	1			2										4
でござりました。																						2										2
でござりませう。			1															1				5										7
でござりませう＋と																						3										3
でござりませう＋条件																						1										1
合 計	0	1	1	2	0	1	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	3	1	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32

図表2-5

	序	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8	巻9	巻10	巻11	巻12	巻13	巻14	巻15	巻16	巻17	巻18	巻19	巻20	巻21	巻22	巻23	巻24	巻25	巻26	巻27	巻28	巻29	巻30	合計
なり	136	660	229	378	76	302	246	314	266	196	279	315	404	346	242	274	300	311	377	376	462	396	366	350	281	324	304	256	260	459	376	9,861
なら(ば)		16	9	10	4	19	10	15	5	16	7	5	6	8	2	15	8	13	13	12	11	20	7	17	7	18	13	9	9	18	11	333
なれ(ば)	11	69	31	27	10	45	29	25	19	23	24	21	31	19	28	29	41	21	41	31	61	43	25	44	65	44	31	48	35	99	76	1,146
なれ(ども)	8	35	15	11	1	20	9	14	10	10	8	8	6	7	10	10	8	6	13	10	22	10	6	13	7	6	9	9	2	12	15	330
合 計	155	780	284	426	91	386	294	368	300	245	318	349	447	380	282	328	357	351	444	429	556	469	404	424	360	392	357	322	306	588	478	11,670